

巻頭のこ と ば

病院事業管理者 山 本 敏 行

仙台市立病院を利用しておられる市民にお集まりいただいて、座談会を開いたことがあった。席上、「市立病院について、一番に感じておられることは……」とお尋ねしたところ、異口同音に「長く待たされる病院」という答が返ってきた。

これはもちろん、病院としては決して褒められた話ではない。何とかして待ち時間を短縮させたいものと、いろいろ苦勞しているのである。だが、それでも捌ききれないほど、外来は、多くの患者さんと混雑するのである。病棟はといえば、ここもまたベッドがいつもいっぱいだ。一つ空くと、すぐに新しい患者さんが入院される。

それに加えて、昨年4月からは内科系、外科系、小児科の医師がそれぞれ24時間体制で張り付く救急センターを開設した。センターには36床の救急ベッドがあるが、毎日、空床確保に悪戦苦闘している。医師たちは、あるときは本院へ、あるときは救急センターへと、あわただしく走り回っている。ほかの職員たちも、目の回るほどの忙しさだ。まさに「地域医療の最前線を死守する、わが市立病院」である。

もちろん、本格的な実験研究が行えるほどの時間の余裕もなければ、予算もない。実験室の設備も、研究機器もない。いまの医療費抑制政策の下で、どうしてそんなものが整備出来ようか。

そんな中で、CPCや症例検討会、各種の研究会などが頻繁に行われている。日夜診療に追われる厳しい状況下で、なおかつスタッフは、自己の研鑽に励んでいるのである。その活力と向上心を、私はこの上なく誇らしく思う。

本誌に載せられた論文は、すべて、そういうスタッフの活動の中から生まれたものだ。ご一覽いただければわかるように、投稿者は、医師ばかりではない。看護婦もそのほかの医療技術者も入っている。本誌は、病院全体で作りに上げた、われわれ全員の雑誌なのである。それだけにわれわれは、この小さな医学雑誌に限りない愛着を感じている。(だから私は、本誌を、自分の本棚の一番目につく真ん中に並べている。)

今日、刊行される医学雑誌は膨大な数に上り、その中に、大量の新しい医学情報が詰め込まれている。ある論文が、ほかの論文に何回引用されたかを指標にすれば、その論文の活用度を測ることが出来る。そして、一般的には、活用度の高い論文を数多く採録している雑誌が、優れた雑誌として高く評価される。こういう評価からすれば、本誌などは取るに足らない弱小誌かもしれない。もちろん中には貴重な珠玉の一編も含まれていようが、まあ全体としてみれば、本誌の学界に対する貢献度は、どう鼻眞目にみても、あまり高いとはいえないだろう。

こんな雑誌ではあるが、これからも本誌をみんなで大事に育てていきたい。本誌が絶えることなく刊行を続けているかぎり、わが市立病院の活力は失われていないと、私は胸を張って言えるのである。